

学会発表渡航支援報告書

(ふりがな) 氏 名	はやし ゆか 林 由華	所属・職名
	もとき たまき 元木 環	京都大学文学研究科言語学・大学院生 京都大学学術情報メディアセンター・助教
e-mail	y-hayashi@ling.bun.kyoto-u.ac.jp tamaki@media.kyoto-u.ac.jp	
発表題名 (英語)	The Digital Museum project for the documentation of Ikema Ryukyuan	
著者名	Yukinori Takubo, Yuka Hayashi, Tamaki Motoki, Chigusa Kurumada	
会議名 (英語)	The 1st International Conference on Language Documentation and Conservation (ICLDC)	
開催地(国、市)	USA, Honolulu	
参加期間	2009年 3月 12日 ~ 3月 17日	
<p><会議の概要></p> <p>The 1st International Conference on Language Documentation and Conservation は、Language Documentation という比較的新しい分野におけるはじめての大きな国際会議である。Language Documentation とは、主として未知もしくは記述の少ない言語の調査記述を行う調査言語学から生まれた分野である。特に消滅の危機に瀕した言語(危機言語)について、文法や音韻・形態といった言語学的関心に基づいた記述だけを行うのではなく、</p> <ol style="list-style-type: none"> 1) あらゆるメディアを用いた一次データを含む包括的な言語資源を、 2) 言語学者のみならずその言語・文化に関心のある人全て、特にその言語のコミュニティ内の人々が活用できるような方法で、 3) 長期保存に耐えうる形で保存する <p>というものであり、言語「記述」(description) に対して言語「記録」(documentation) と呼ばれている。グローバル化にともなって世界中で多くの言語が急速に失われていっていることを背景とし、ここ 10 年ほどで急速に広まった。</p> <p>この会議は、そのような Language Documentation の理論的發展を追うと共に、それぞれの実践の実態、実践における技術や問題点を総括するものである。その性質上、言語学者だけでなく、言語記録に携わる様々なバックグラウンドを持つ人々が参加した。</p> <p><発表内容></p> <p>The Digital Museum project for the documentation of Ikema Ryukyuan として報告者チームが発表したのは、琉球語宮古池間方言を中心とした現地調査を基に行っている、言語と文化のデジタル博物館の構想とそのアルファ版の紹介である。同方言は、上記にあげた危機言語にあたり、早急な</p>		

学会発表渡航支援報告書

記録が望まれている琉球語諸方言のひとつである。発表は、博物館の構想について説明するとともに、実際の博物館のデモンストレーションを行うという形で行った。

デジタル博物館は、京都大学文学研究科言語学教室を中心とする言語学調査のチームと京都大学学術情報メディアセンターコンテンツ作成室との共同研究として他分野の研究者の協力も得ながら進められており、主に言語学調査チームが収集した言語や文化に関するデータを、多くの人、特に地元の方が見られるような形にしていくためのアイデアである。コンテンツとして入りうるのは研究者側のデータだけでなく、地元の方による言語作品（絵本やオリジナル歌劇など）なども含み、その発表の場としても機能する。また、言語学習のためのツールも備えており、地元の同方言を使うことのできない若い世代や、その他この言葉に興味を持つ人々が学習することのできる場も用意している。

研究者の一次データは、それそのものだけでは断片的な記録でしかなく、多くの人に意味のあるものになるためには詳しいメタデータやアノテーション、背景知識などの意味づけが必要になる。ここでは、一次データはそのままの形で残しつつ、「博物館展示」という行為を通じてコンテキストを再構築することにより、それを達成するための具体的な形を提示した。



会議の様子

<質疑応答>

質疑応答の時間をデモンストレーションをより深く見せていくことに使えたため、多くの人に関心をひき、「これは外部からアクセスすることができるのか」「見てみたいがどのような手続きをすればよいか」「おなじような展示スペースはどのようにすれば構築できるのか」「このようなものを自分も作ってみたいが、手伝ってくれるか」などの問い合わせをたくさんいただいた。

<その他感想など>

「質疑応答」の欄でも言及したが、発表はたいへん好評で、その後の会議期間もいろいろな方とそれについて話すことができた。



学会発表渡航支援報告書

会議全体としては、アーカイビストをはじめとする技術者の参加、記録対象となる話者コミュニティの方の参加も多くあり、いつも参加している言語学プロパーの学会とは異なり自分にとって新鮮な雰囲気だった。もともと Language Documentation という分野自体、言語学者だけでは達成しがたいものであり、そのような人々の生の声をきくことはこれからこのプロジェクトを進めていく上でも大変参考になり、有意義な会議参加となった。(林)

現在、学術コンテンツの発表の場はそれほど多くなく、このような学会参加は大変貴重な経験となった。今回作成した電子博物館のフレームワークや中に収録したコンテンツについて、共同研究グループ以外の言語学者やアーカイビストから多くの好意的な反応があった事から、コンテンツの有用性を認識することができた。また、会議を通して様々な言語記録の研究や活動を知ることができたため、本プロジェクトを進める上でも、これから研究・制作活動を進める上でも大変参考になり、励みとなった。(元木)